

令和8年度までの目標	国語		算数・数学	
	自校A B層の割合	50.0%	自校A B層の割合	50.0%

目標達成に向けた取組

3つの観点	教員の指導力向上	基礎学力の保障	学習習慣の確立
学校全体の取組	<ul style="list-style-type: none"> どの教科の授業も、児童にとって「主体的・対話的で深い学び」となる展開を工夫して行い、学習規律を徹底する。(例 問いの共有→自力解決→協働解決→価値の共有→振り返り→次時へのつながりの確認 等) 年に3回程度、教員がお互いの授業を見せ合い、より改善した授業展開を考え、実践する。 主幹教諭が、年に3回程度師範授業を行い、他の教員に指導・助言を行う。 中学年以上で、一部教科担任制を行い、教科指導の専門性を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 週に2回程度、1回につき15分程度の学習タイムを毎週設ける。(国語科、算数科) 国語科においては、音読、漢字学習の復習、視写、聴写、簡易作文、俳句作成などを、算数科においては、計算練習、作図練習、ミニテストなどを各学年の発達段階に応じて計画的に繰り返し取り組み、基礎学力を高めていく。また、教育用タブレットのミライシード内のデジタルドリルも活用する。 3年生以上は、年に14回程度木曜日に「基礎・基本の時間」を設け、国語科や算数科に加え、理科や社会科も含めた復習、反復学習を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が、毎日学年×10分+10分程度家庭学習に取り組めるように、発達段階に応じた課題を出し、教師がチェックする。 年3回の家庭ルール期間や長期休業期間などに、児童が、教育用タブレットを使って、「ミライシード」内にあるデジタルドリルにすすんで取り組めるようにする。 すすんで自主学習をした児童のノートのコピーを教室内に掲示するなどして、学級全体の学習意欲を高めていく。
特に支援が必要な児童・生徒への手立て	<ul style="list-style-type: none"> 児童全員が自信をもって答えられるような問題を授業の中に取り入れ、自己肯定感や有用感を高めていく。 問題に対して、教師がヒントを伝える時間を随時設け、解決につなげる。 児童が授業中に書いた振り返りの内容を教師が随時点検し、よりよい指導法を考え、実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間内に問題解決が全て終わらない児童に対しては、問題数を絞って取り組ませる。 月、火、木曜日等の会議のない放課後の時間を使って、個別指導をする。 現在の学年の学習以前のものが分からない児童には、自主学習用の教材を教師が準備し、繰り返し練習させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 支援が必要な児童には、問題数をしぼったり、個別の可能な課題を出したりすることで、自己肯定感を保ちながら、家庭学習に取り組めるようにする。 デジタルドリルには、1年生の物から取り組ませ、児童がスモールステップで課題に取り組めるようにする。
成果指標	<ul style="list-style-type: none"> 全国学力調査の、「国語や算数の勉強が好きですか」の児童質問回答において、肯定的なものが65%をこえるようにする。 全国学力調査の「学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の児童質問回答において、肯定的なものが、75%をこえるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学年が、学期末用に準備したワークテストで、8割達成者が85%をこえるようにする。 東京都ベーシックドリル診断テストで、8割達成者が80%をこえるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 全国学力調査の、「学校の授業時間以外に普段(平日)1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか」の児童質問回答において、「1時間以上」が、80%をこえるようにする。 全国学力調査の、「学校の授業時間以外に普段(休日)1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか」の児童質問回答において、「1時間以上」が、70%をこえるようにする。